混成第九旅団の日清戦争（5）

――新出史料の「従軍日誌」に基づいて――

原田敬一

〔抄録〕

本稿は、新出の史料である「従軍日誌」一編を使用して、「日清戦争」を従軍者がどのように描いているか、を追究した『歴史学部論集』創刊号以来掲載してきた論考の続きである。「従軍日誌」の著者は、混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊に属する将校（下士官の可能性は完全には排除できていない）であり、一八九四年六月六日から翌年二月一四日まで日記を書き続けた。戦争が終わって後の清書や、整然と整理された刊行物ではなく、戦場という現場で書いていた日記と推測される。しかもこの執筆者は、日本の大本営が、日清戦争開戦前に、「居留民保護」を名目に朝鮮に派兵した混成第九旅団のうち、最初に派遣された部隊の一員であったという特色がある。参謀本部が編纂し、刊行した『日清戦史』全八巻には、中塚明氏や一ノ瀬俊也氏などにより遺漏や改ざんの跡がいくつか指摘されており、そのことも、「従軍日誌」という軍人自身の記述により再検討することができる。『歴史学部論集』創刊号に六月六日から七月二六日まで、同第二号に七月二七日から九月一四日（平壌総攻撃前日）まで、第三号に九月一五日（平壌総攻撃日）から一〇月二三日まで、第四号に鴨緑江渡河戦にむかう一〇月二四日から、鴨緑江渡河戦、九連城攻略戦を経て、冬期の鳳凰城攻略戦情報までを掲載した。本号は、朝鮮の義州での冬営、年末の九連城への進駐と続き、二月一八日突然終わる。今回がこの『従軍日誌』についての最終報告である。

キーワード　日清戦争、従軍日記、混成第九旅団、砲兵、将校

はじめに

混成第九旅団の戦争は中国へ移った。筆者の部隊は、朝鮮の義州に戻り、冬営となった。冬営中も戦闘は続くが、清国軍の拠点を破壊したり、占領するという大きな山は越え、四月に成立する講和条約も見えてくるような記述となっている。戦闘場面の続いた前回までとは異なっている。緊張は解けたように見え、前線から送られてくる戦闘情報の記述だけとなった。そこからも戦争は見える。

一　冬営に入る

（1）義州での冬営

第一軍司令部が第五師団に対し、朝鮮の義州で冬営するように命じた冬営命令を第五師団が受領したのは一一月一二日（『日清戦史』第二巻三九一頁。）それに基づいて第五師団司令部が師団命令を各部隊に出したのは翌一三日午後四時、九連城においてであった（第二巻附録第三十四「第五師団命令」）。混成第九旅団は二つに分かれ、旅団司令部や歩兵第十一聯隊（二箇大隊）などは中国の九連城に、筆者の部隊である野戦砲兵第五聯隊第三大隊は、歩兵第二一聯隊の二箇大隊などとともに、朝鮮の義州に冬営するよう命じられた。師団命令には、冬営中も兵站司令官の求めに応じて、「何時ニテモ糧秣ノ護衛及之カ運搬ノ監視兵ヲ出スヘシ」（前掲「第五師団命令」）などが記載されていたが、戦場に近い九連城冬営の各部隊はともかく、鴨緑江を渡って朝鮮に冬営している筆者の部隊などは緊張が弛んでいることが読み取れる。

また以後頻繁に鳳凰城などの前線からの情報が入ってきて、『従軍日誌』に記録されるが、これは既に義州―鳳凰城（一〇月三一日開通）、九連城―安東県（一一月五日開通）、九連城―大孤山（一一月二四日開通）、鳳凰城―連山関（一一月一五日開通）などと一一月下旬までには、師団主力の駐屯地と主な前線が電信で結ばれていたことが反映している（『日清戦史』第二巻附録第三十五「義州、鳳凰城、大孤山地方電線架設」）。

（2）第三師団掩護と立見第一〇旅団

山口少佐は山口支隊の司令官で、同支隊は歩兵第二一聯隊第二大隊と騎兵四騎から構成されていた。山口支隊が一二月一三日に鳳凰城に到着した、と始まるこの電報は、冬期作戦を説明しなければ理解できない。この一二月は、山縣有朋第一軍司令官の持った、首都北京まで攻め入って、城下の盟を果たす、という野望がまだ生きている段階で、傘下の第三・第五両師団は冬期の清国南部攻略作戦を進めなければならなくなる。最も信頼できる桂太郎中将の率いる第三師団（安東県まで進出済み）には、海城・営口・牛荘への攻撃戦が命じられ、第五師団にはそれを援助する前進作戦が命じられた。『日清戦史』には次のようにある（第二巻四九八頁）。

第三師団海城攻略ノ為メ将ニ安東県ヲ出発セントスルヤ、第五師団長野津中将ハ第一軍司令官山縣大将ノ命ニ依リ此攻撃ヲ容易ナ

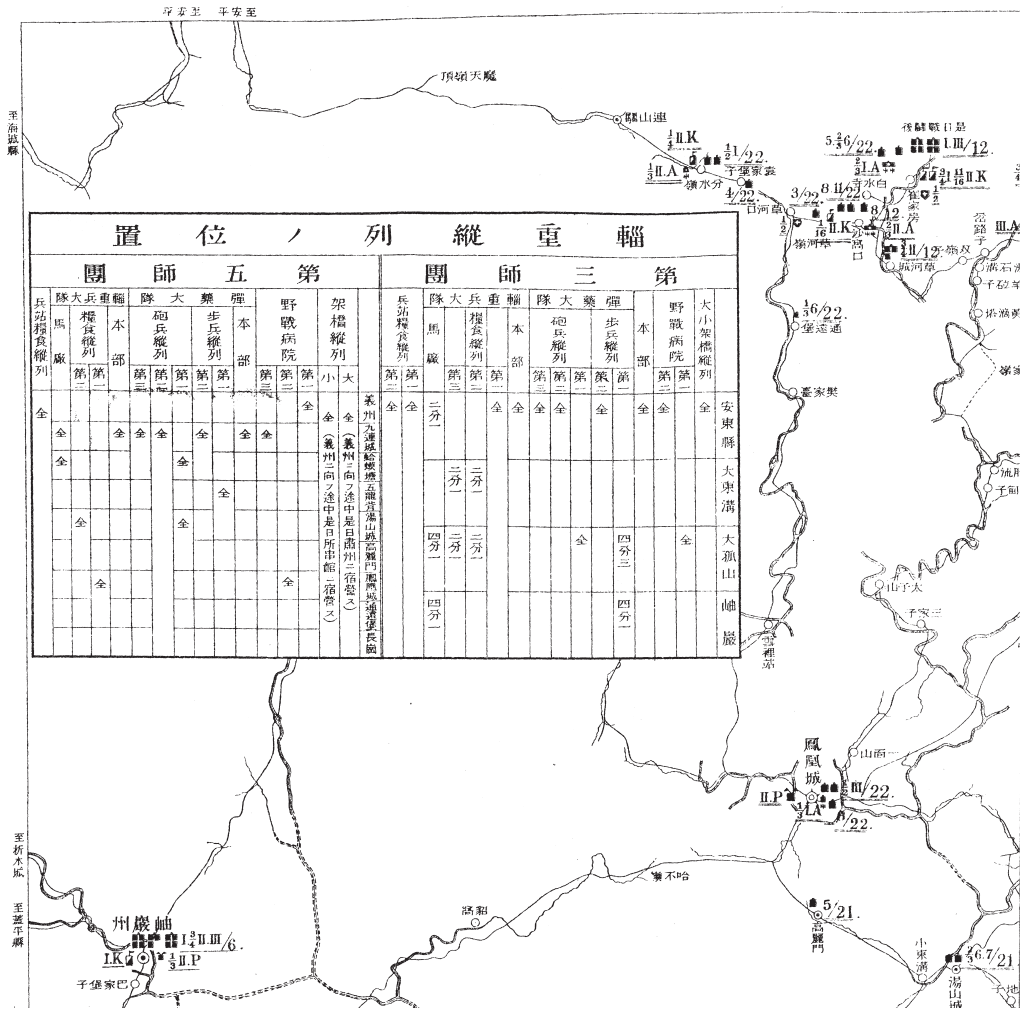

図　第一軍諸部隊之位置図

ラシムル為メ、立見混成旅団ノ一部ヲ進メテ摩天嶺附近ノ敵ヲ牽制セシメントシ、十二月四日参謀歩兵中佐福島安正ヲ在鳳凰城立見少将ノ許ニ派シ、之ニ関スル訓令ヲ伝達セシメタリ

既に九連城（第五師団司令部の駐屯）と鳳凰城は電信が開通しており、わざわざ中佐参謀という高官を立見旅団長のもとに派遣するのは、この作戦が立見に受け入れられるかどうか、不安もあったからではないか。立見は翌五日に福島中佐からの伝達を受け、直ちに「用フヘキ兵力竝ニ出発ノ時日」を決定し、六日に第五師団長宛の電報で報告した。師団長は即日承認し、追加の電訓を次のように打った（同）。

貴官ハ十二月十二日ニ連山関附近ニ赴キ摩天嶺ニ在ル敵ニ対シ示威運動ヲ為スヘシ、然レトモ戦闘ヲ交フル勿レト

立見混成第一〇旅団の駐屯する鳳凰城から連山関までは約八五キロあり（「第一軍諸部隊之位置図」『日清戦史』第二巻、挿図第一）、清国軍が展開していると推測された摩天嶺は、連山関の先約二〇キロという遠距離にあった（以下、図を参照）。立見旅団長は、歩兵第二二聯隊を

基幹として、騎兵一箇中隊、野砲一箇中隊（ただし本来は六門編制だが、「患者、患馬多キ為メ四門編制ト為セリ」第二巻四九九頁、となった）、工兵一箇中隊（一箇小隊欠）、衛生隊半部、食糧縦列（中隊にあたる）一個で「牽制支隊」とし自ら率いていくこととした。立見旅団が拠点としているのは、鳳凰城と、その北方五五キロにある通遠堡の二ヶ所で、鳳凰城守備隊として歩兵第一二聯隊（一箇中隊欠の計一一個中隊）、騎兵一箇大隊（二個中隊）、野砲一箇大隊（一個中隊欠で三個中隊＝定規では野砲計一八門）、工兵一箇小隊、衛生隊半部、野戦病院一個を、通遠堡守備隊として歩兵一個中隊を置くことにした（第二巻、四九八～五〇〇頁）。通遠堡守備隊は連山関との中間点にあるため、連絡・兵站拠点として設けたものだろう。いずれにしても立見旅団は、ほぼ二分され、八五キロ前進した地点を確保し、牽制しながら、大きな拠点である鳳凰城を守り抜くという課題を与えられたのである。牽制支隊の野砲編制が「患者、患馬多キ為メ」二門減らして四門編制に変更したことから考えると、鳳凰城守備隊の野砲三個中隊も、定規の一八門は編制できず、少なかったと考える方が合理的だろう。その不備を補う為だろう、守備隊の砲兵として「予備砲廠ノ分遣隊（野砲二門）」が加えられていた。さらに一週間後の一二月二三日、第五師団司令部は、鳳凰城の砲兵隊を強化するための移動を命じることになる。

（3）立見牽制支隊の派遣

工兵一個中隊など立見牽制支隊の前衛は、七日に鳳凰城を出発し、九日までに鳳凰城北方二〇キロの雪裡站に到着した。前衛は一〇日朝雪裡站を出発、本隊は同日朝までに雪裡站付近に集合するよう、旅団長命令が九日夜鳳凰城で発せられた（『日清戦史』第二巻五〇一頁）。一〇日前衛が雪裡站を出発すると、その途上で戦闘が始まった。騎兵五、六名、次いで騎兵約五〇、騎兵約二〇〇、歩兵数百と相次いで戦闘を行い、昼頃には樊家台の東西の高地に、歩騎兵約二千と、無煙火薬速射砲二門か三門を持つ砲兵が銃砲火を浴びせるまでになった。前衛の戦闘を砲声で知った本隊は、戦場に急行した。砲兵も急展開して、本道近くに拠点を設け、砲兵隊を砲撃しようとしたが、技術的に無理だった。

是時敵ノ砲兵ハ砲撃ヲ為セシモ、無煙火薬ニシテ容易ニ其位置ヲ知ル能ハス。須臾ニシテ之ヲ発見セシカ、中隊長ハ距離過大ニシテ我火砲ノ効力外ニ在ルモノト認メ、之ヲ射撃スルコトヲ避ケ、却テ敵ノ右翼タル其西方高地上ノ歩兵ハ頻リニ友軍ヲ瞰射シツヽ在ルヲ見、先ツ之ニ当リシナリ（『日清戦史』第二巻五〇五頁）

無煙火薬を使用し射程が日本の野砲より長いというのは、清国軍の速射砲がドイツ製であったことを物語っている。戦闘の大きな山は午後三時頃に越え、日没頃には樊家台周辺を占領し、野営することになったが、激戦だった。戦死者は下士官と兵卒で一一名、負傷者は将校・下士官・兵卒で計四八名となった。費消の小銃弾約三万発、砲弾五三発（『日清戦史』第二巻五一〇～五一一頁）。

立見牽制支隊は、翌一一日には通遠堡北方一五キロの草河口と、もう五キロ連山関に近づいた分水嶺を占領し、野営することになった。

（4）鳳凰城の防衛戦

立見牽制支隊が鳳凰城を出発してから、鳳凰城守備隊は敵襲に晒されていく。一二日朝、斥候に出した騎兵や歩兵隊が「優勢ノ敵（歩兵約千名、騎兵百余騎ニシテ其他後続部隊アルモノ、如シ」（第二巻五一六頁）に出会い、防戦しつつ鳳凰城に戻ってきた。本格的な戦闘は一三日朝から始まるが、守備隊長友安治延歩兵大佐は、一二日午後三時五〇分、敵状を野津第五師団長に打電した。野津は、第九旅団長（在九連城）に歩兵一箇大隊の前進準備（一三日に歩兵第一一聯隊第一大隊：大隊長一戸兵衛少佐、が前進した）、山口大隊（湯山城守備隊の歩兵第二一聯隊第二大隊）に友安大佐からの電命あれば直ちに鳳凰城に応援に行くべきことなどを各隊に命じた（山口大隊へは電命）。午後八時五五分の友安電報で、清国軍約二千、砲兵はなし、という状況を知った野津は、山口大隊は一三日朝出発、鳳凰城に向かえと打電し、空いた湯山城には第九旅団の一箇大隊を前進させるよう命じた（『日清戦史』第二巻五二〇～五二二頁）。山口大隊は一三日に湯山城を出発し、「烈風酷寒ヲ冒シ」（同五三〇～五三一頁）午後四時四五分鳳凰城郊外の防御陣地に到着した。『従軍日誌』が山口少佐から第九旅団長宛の電報として、一三日午後四時過ぎ「鳳凰城ニ着ス」というのはこれを指している。

鳳凰城守備隊は、山口大隊の応援も得て、一四日午前六時過ぎから総攻撃を行った。『従軍日誌』が「十三日ノ戦争ニ参与シ」というのは書き間違い。山口大隊は左縦隊となり、正面攻撃を分担した。戦闘はやはり激戦となったが、午前九時には敵陣地を占領し、追撃戦も午前十一時頃には終わった。大砲四門（山砲、野砲各二門）を奪取する（第二巻五四一頁）。この日の戦闘で下士官・兵卒の戦死者一二名（将校なし）、負傷者は将校三名、下士官・兵卒五九名だった（第二巻「附録第四十　鳳凰城防戦守備隊死傷表」）。『従軍日誌』が山口報告として記すのは遙かに少ないので、途中報告だろう。

午後、守備隊は追撃戦のため、鳳凰城北方十五キロの長嶺子まで前進し、宿営したが、翌一四日午後五時頃、立見旅団長から鳳凰城に帰還すべし、という電報を受けとり、一五日朝出発して、同日鳳凰城に帰った（第二巻五四八頁）。これも『従軍日誌』の山口報告通りである。

分水嶺と草河口に前進した立見牽制支隊は、大きな戦闘を経ることもなく、「要スルニ牽制支隊ノ方面ハ殆ト無事ニ経過シタリ」（第二巻五四九頁）のだが、『従軍日誌』が記録する一二月一二日付け立見少将からの電報は『日清戦史』に記載がない。これによれば、一二日の時点で、連山関方面の清国軍は退却したと思われ、それは「海城陥ルノ徴候ナラン」と楽観的に見ていた。単なる推測だから『日清戦史』編纂者たちは採用しなかったのかも知れない。

友安大佐の報告は一五日に鳳凰城に帰還してからの戦闘報告で、鳳凰城襲撃部隊の退却路を記し、いったんは退却したがまた草河口方面に襲撃があるかも知れない、という推測を述べている。この内容は『日清戦史』にはない。損害の数字については『日清戦史』より多い。『日清戦史』（前掲「附録第四十」）では、戦死者一二名と将校の負傷者三名（岡部克己歩兵中尉・浅田丹治歩兵中尉・荘司都盛歩兵少尉。

三名とも小隊長）は一致しているが、負傷者数は『日清戦史』五九名、『従軍日誌』六三名で、四名の差がある。理由は不明。『日清戦史』では下士官と兵卒の区別はされていないから、『従軍日誌』の数字を信ずれば、小隊長三名と下士官七名の合計一〇名が負傷していることになり、突貫攻撃などで先頭に立つ下級士官・下士官の損耗が激しいことがわかる。戦利品の記述は『日清戦史』には大砲四門しかなく、それがドイツ製のクルップだったという『従軍日誌』の情報は貴重だ。「捕虜十六」も記録しているが、これも『日清戦史』にはない。彼らは無事に日本の捕虜収容所へ送られたのだろうか。襲撃部隊が「依将軍」というのは、黒竜江将軍依克唐阿のことで、立見尚文第一〇旅団長は、牽制支隊の任を終えて、鳳凰城に帰る時、草河口の民家の壁に一戦を交えたかったという漢文を貼り付けた（第二巻五五五頁。文章は第二巻「附録第四十二　立見少将ノ依克唐阿ニ与フル書」）。

十二月十六日　晴天　〇・一三〔零下一七・七度。筆者は毎日朝の気温を記録しているが、華氏なので計算した摂氏の気温を〔　〕内に示す。以下同じ〕

山口少佐ヨリ旅団長宛午后八時四十五分発

大隊ハ十三日午后四時過キ鳳凰城ニ着ス、該地ニ露営十三日（ママ）ノ戦争ニ参与シ敵ヲ撃退シ之レヲ追撃シ長嶺子ニ至リ宿営、下士以下即死五負傷十五、十五日鳳凰城ヘ帰リ舎営／十二日午前九時三十分草河口ニ於テ立見少将ヨリノ報告　我前面ノ敵ハ前哨中隊長ノ報告ニ拠レハ退却セシ者ノ如ク明日騎兵斥候ヲ出ス、察スルニ海城陥ルノ徴候ナラン

十五日午后十一時三十分鳳凰城友安大佐発

敵ノ主ナルモノハ遠ク賽馬集街道ト賽馬集街道ノ中道トノ西方「サニシヤラ」ヲ経テ退却シ、一部ハ吉林街道ト賽馬集街道ヲ退却シ、一部ハ吉霧河ノ下流ヲ余カ攻撃前渡リタル、敵ハ騎兵卒歩兵六百斗リハ「ヨユカホル」東北方ニ退却シ今夜逃走四分裂ニシテ遠ク退却セリ、捕虜ノ言ニ拠レハ敵ノ一部ハ草河上地方ニアル者ノ如ク、退却シタル敵之レヲ合スレバ又草河口来ルヤモ斗リ難シ、我戦死兵卒十二負傷園田浅田ノ二中尉庄司少尉下士七兵卒五十六名ナリ／分捕大砲「クルツフ」山砲二門野砲二門小銃八十五軍旗七本刀十二本捕虜十六敵ノ死体発見セシモノ百三十九其他馬及雑口若干、敵ハ依将軍率ヒル黒竜江ノ率ヒタル馬隊ナリト

二　冬期作戦の記録

（1）第三師団の析木城占領

『従軍日誌』は、義州駐屯中、他の部隊の情報や戦闘情報を克明に記録している。一つ一つは長いから、記憶の中にあるものではなく、部隊の掲示板に貼られたものを記録しているか、直接本部から入手した情報を記していると思われる。こうしたことができるのは兵士ではないため、筆者を将校か下士官と推定している。それでも記録に間違いがある。一七日（月曜）の分では、友安守備隊の鳳凰城帰還が一七日とされているが、これは前記した通り一五日のうちに帰還しているの

が事実である。一五日夜半の電報が鳳凰城から発信されたことは『従軍日誌』筆者が記録していた通りである。

第三師団長桂太郎中将の電報が、一七日の『従軍日誌』に記された。冬期の直隷作戦を願望していた山縣有朋第一軍司令官や第一軍司令部は、大本営に強く要求して海城攻略作戦を認めさせた。その主力は桂の第三師団で、第三師団は一二月九日までに岫巖に集結し、まずその五〇キロ北にある析木城攻略を進めていた。積雪と凍結した山野を重武装で移動すること自体が困難を極めていた。一二月一二日第三師団の前衛部隊が析木城に到着したが、清国軍は撤退して、もぬけの殻だった。総統馬三元らは、析木城の宿舎を焼き、撤退していた（第四巻四六頁）。師団本隊は同日午前一〇時半に析木城に到着し、午後二時半楊家屯に達し、村落露営になった（同五一頁）。『日清戦史』がこの経過を一二日のこととするのに対し、『従軍日誌』は一四日午前一〇時までの出来事とする電報を採録している。一四日付桂電報が、「前衛ヲ以テ営城子ヲ占領セシメタリ」と書いているのは、『日清戦史』で一二日午後五時半のことと記録されているから（同五一頁）、一二日夜発信の電報であるのを写し損なったと考えたい。『従軍日誌』が記す「揚家店」は「楊家屯」、「大石揚」は「大石橋」の書き誤り。桂の文末にある「昨今両日」の戦闘の負傷者七名とは、析木城攻撃の前哨戦である一一日の二道河子での戦闘の負傷者七名（同四一頁）と一致する。ただ「敵ノ死傷約百名」は『日清戦史』には記載がない新情報。

一十二月十七日　晴天　〇・八（零下一七・三度）

本日友安大佐ノ率ヒル枝隊ハ鳳凰城ニ帰ル
亦桂中将ヨリ情報左ノ如ク　十四日午前十時発
敵ハ今朝拆木城ヲ焼キ海城方向ニ退却セリ、師団ハ之レヲ追撃シテ揚家店ニ達シ前衛ヲ以テ営城子ヲ占領セシメタリ、尚ホ敵ノ一部ハ大石揚ヲ経テ営口ニ向ヒ退却セリ、明日師団ハ海城ニ向ヒテ前進セントス／拆木城ニハ僅カニ二家ヲ焼失セシノミニシテ我兵之レヲ消シ止メタリ、昨今両日ニテ敵ノ死傷約百名昨日報セシ負傷者ハ七名ナリ

（2）第三師団の海城占領

零度以下の晴天が続いていたが、桂第三師団長からの電報が一八日も記録されている。海城攻略をめざし、一二日には楊家屯などに進駐した第三師団は、同日午後九時、一三日に海城を総攻撃、という師団命令を発し、戦闘序列を指示した（第四巻五二～五三頁）。若干の戦闘の後、一三日午前一一頃より、前衛部隊が海城に進入し、本隊も続いて入城した。桂師団長が山縣第一軍司令官に、海城占領という報告を発送したのは午後一時という早さだった。『従軍日誌』がこの海城攻略を「十五日」と記すのはおかしい。『日清戦史』の記述は次のようになっている。

以上述ヘ来リシカ如ク第三師団ハ竟ニ甚シキ抵抗ヲ受クルコト無ク海城ヲ占領シ、敵ノ大部ハ遼陽方向ニ、一部ハ牛荘方向ニ退却シ、其兵力約五千ナルヲ確認セシカハ、師団長ハ茲ニ海城ニ宿営センカ為メ午後四時命令ヲ下シ、左ノ如ク宿営警戒セシメタリ

（第四巻六七頁）

一八日（火曜）も晴天で、寒く、記述は桂第三師団長からの情報を転載するだけにとどまる。

遼陽方向への退却や、兵力五千など共通する点もあるが、最後の損害についての記録は異なる。『日清戦史』は清国軍の損害を記さず、日本軍は歩兵第一九聯隊の下士官・兵卒四名の負傷を記録している。桂師団長の報告には「我兵死傷ナシ」とあるのは、一三日の夜か一四日の朝に打電したから情報不足だったと考えられるが、『従軍日誌』の記録する「十七日午前七時」の情報としては腑に落ちない。やはり日付の記録間違いだろう。

十二月十八日　晴天　〇・一四〔零下一七・七度〕

情報アリ、左ノ如シ

十七日午前七時　中将

三原大隊ハ十五日双嶺附近ニ於テ敵ノ散兵ヲ打チ捕虜三名ヲ得タリ、仝隊ハ昨夜河城口ヨリ泉寺ニ通スル処ニ宿泊セリ／第三師団ハ十五日海城ニ敵ヲ撃退、午前十一時海城ヲ占領セリ、敵ハ遼陽ニ向ヒ退却セリ、其兵力約五千、我兵死傷ナシ、敵ノ死体未詳ナレトモ四五十モ有ランカ

（3）山縣有朋第一軍司令官の更迭と海城防衛戦

一二月一九日（水曜）も零下が続く。宿舎近くの火事があったらしい。兵卒と軍夫、計一二名が負傷なので、そうとう大きい火事騒ぎとなった。山縣有朋の更迭も一九日の『従軍日誌』に記された。その経過は『日清戦史』第二巻五五六～五五九頁に「四　第一軍司令官ノ更迭及軍司令部岫巖へ前進」として詳しく説明されている。更迭の意味については議論があるのだが（藤村道生『日清戦争』、斎藤聖二『日清戦争の軍事戦略』など）、斎藤説の、直隷作戦実行のために病気の山縣を更迭したという判断を支持する（拙著『日清戦争』一八八頁）。山縣は一七日に広島まで戻り、天皇に拝謁の後、一九日に正式に解任された。直ちに野津道貫第五師団長が、師団長を免ぜられ、第一軍司令官に補された。後任の第五師団長は奥保鞏（九月に欧州出張から戻ったばかり）が任じられた。一九日の『従軍日誌』には、野津の師団長を免じ、第一軍司令官に補されたことだけが記された。現場の人事異動がいち早く伝わった。久し振りの慰問品配賦があり、宝丹一個と守り札だった。宝丹は気付け薬として江戸時代から有名で、『従軍日誌』の記述からは、常備の携帯薬ではなく、寄付であったことがわかる。

十二月十九日　晴天　〇・八〔零下一七・三度〕

此日宿営近傍ニ火事アリテ我隊出シテ消防セリ、兵卒十一名負傷人夫一名負傷／此日野津中将ハ免本職ヲ更ニ補第一軍司令官、第五師団ハ第一軍司令官ノ直属トナル／此日小寄贈ノ宝丹一個ツヽ分配、尚ホ浄土宗賑恤部ヨリ守護札ヲモ分配セラル

二〇日（木曜）も晴天の寒さ。補給が改善されたのか、これまでの中国米・朝鮮米から日本米になった。

十二月二十日　晴天　〇・九〔零下一七・二度〕

此日ヨリ支那朝鮮米ヲ廃シテ日本ヲ給与セラル

一九日に広島大本営で発令された山縣有朋を第一軍司令官から免ずる

という情報が、やっと二一日（金曜）に入ってきた。仙波太郎第五師団参謀と一戸兵衛大隊長の異動を記録しているのは、『従軍日誌』の著者が尉官クラスのため、関心が大きかったということではないか。著者は下士官ではなく、砲兵大尉か砲兵中尉と想定したい。ただこの情報には誤りがある。秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』によれば、一戸は一八九四年一二月に中佐に昇任し、第五師団参謀になったにとどまる。中佐で師団参謀長にはなれない。仙波については、この転任の事実はないと思われる。『総合事典』で関連する記載は次のようになっている。

一八九四年六月　第五師団参謀／一八九五年五月中佐／一八九五年七月第二師団参謀／一八九六年九月陸士教官

『従軍日誌』と『総合事典』のどちらが正しいのか、現在判定材料はない。二一日午後桂第三師団長からの情報は、海城に迫る宋慶（本拠地：営口）軍への対処と、その延長戦としての缸瓦寨占領だった。地名は電報の音を漢字表記したことと、地図の情報不足も加わって誤記が見られる。宗慶軍が「運動」している「蓋し原屯柳公化」は「東柳公屯」、大島隊が一七日向かった「膝用山」は「晾甲山」、激戦地の「江瓦寨」は「缸瓦寨」の誤記と思われる。

攻撃は一九日早朝から柳公屯、蓋家屯などで始まったが、大きな戦闘をすることもなく、海城周辺に現れていた宋慶軍は撤退していった（第四巻一〇四頁）。蓋家屯から下加河に進んだ大迫隊（歩兵第六聯隊の二箇大隊と歩兵第一八聯隊の一箇大隊を基幹）が、正午前に宋慶軍と衝突した。先頭に立った歩兵第一八聯隊第一大隊（石田大隊）は、「四方ニ一ノ遮蔽物ナキ積雪（深サ三四十珊米）上ヲ前進シ、歩度遅緩シ死傷相踵キ漸次惨憺タル光景ヲ現出スルニ至リシ」（第四巻一一一～一一二頁）と、「此攻撃ニ於ケル石田大隊ノ死傷ハ七十五名ニシテ当時大隊戦員（将校以下三百八十余名）ノ約五分一ナリ、而シテ小隊長七名ノ内傷カサル者僅ニ一名ノミ」（同一一二～一一三頁）という激戦となった。野砲第三聯隊の一部、砲三門が到着し、しだいに砲戦が激しくなると、夕方までに于官屯や馬圏子などを占領していった。午後二時、大迫隊に大島隊を加え、午後四時には缸瓦寨の本格的攻撃が開始され、宋慶軍の野砲六門や歩兵の猛射を受け、苦戦したが、突貫攻撃で午後五時半缸瓦寨を漸く占領する（第四巻一二二頁）。桂の報告に「敵ハ未曾有ノ頑固抵抗ヲナシ」た、とあるように、『日清戦史』も「両軍ノ銃砲声天地ヲ震動シ勝敗ノ決未タ知ルヘカラス」（同）、「是時ニ及ヒ疲労漸ク加ハリ死傷相踵キ茲ニ惨憺タル景況ヲ現出スルニ至レリ」（同）など激戦を記録している。この戦闘での損害は、桂報告の言う「我死傷百余」という生やさしいものではなかった。『日清戦史』の記録を引用する。

而シテ我軍ノ死者六十九名、傷者三百三十九名ナリ（中略）其他第三師団ハ多数ノ凍傷患者ヲ生セリ（二十四日第三師団軍医部長ヨリ軍司令部ヘ出セル報告ニ依レハ同日在海城各隊ノ凍傷患者ハ重傷五百三十九名、軽傷五百二十三名アリ）（第四巻一二八頁）

合計すると一四七〇名という多数の死傷者を出した、まさに激戦だった。激戦だったことが大本営に伝わると、一二月三〇日天皇の勅語が第一軍司令官野津道貫に与えられた。帰国し陸軍の「監軍」に任じら

れた山縣有朋が、功績を評価し、勅語の伝達を天皇に求めたのかも知れない。

其軍ノ一部海城地方ニ於テ優勢ノ敵ヲ邀撃シ雪中数時間ノ劇戦ニ耐ヘ猛烈ノ奮闘ヲ以テ之ヲ破ル、朕深ク其忠勇ヲ嘉尚ス（第四巻一二九頁）

『日清戦史』には翌年元旦に、第三師団長が奉読した、とあるが（同）、第五師団に属する筆者の『従軍日誌』にはこうした記事がない。

十二月二十一日　晴天　〇・八〔零下一七・三度〕

山縣軍司令官ハ免本職、監軍仰付ラル／第五師団参謀仙波少佐本職ヲ免シ歩兵第十一聯隊第一大隊長ニ補セラル／歩兵第十一聯隊第一大隊長一戸少佐ハ中佐ニ任セラレ第五師団参謀長ニ補セラル／情報左ノ如シ、廿一日午后二時四十分着、桂中将報告

十八日宋慶ハ一万余ノ兵ヲ率ヒ我陣地ノ前三里ナル、蓋し原屯柳公化附近ヲ運動シ師団ハ之レヲ駆逐スルノ止ムヲ得ザルニ至リ、昨日去明ヨリ大島隊ヲ膝用山ニ今日大迫隊ヲ以テ蓋家屯ニ向ヒ前進セシメ午后ニ至リ大迫隊ヲ江瓦（ママ）賽（ママ）ト下加河トノ間ニ於テ敵ハ突衝シ、遂ニ大島隊及ヒ予備隊ヲモ戦線ニ加ハリ劇戦四時間、遂午后五時頃見事江瓦賽ヲ占領セリ、敵ハ未曾有ノ頑固抵抗ヲナシ我軍二回ノ突貫ヲ成シタル后、西方及営口ニ向ヒ退却セリ、我死傷百余、敵ノ死傷未明、師団ハ一部隊ヲ仝地ニ残シ置キ主力ヲ以テ仝夜海城ニ凱旋セリ

三　冬期の防衛戦

（1）海城と草河口の防衛戦

二二日（土曜）も零下の晴天だった。冒頭の人事異動情報は、第五師団副官の和知泰一郎少佐のことで、「理部」とは「経理部」の書き間違いかも知れない。

桂第三師団長からの長い報告は、宋慶軍の状況と第三師団の作戦計画など軍事機密に関わる内容であり、こうした内容が大隊程度の部隊掲示板に掲げられたとはにわかには信じ難い。大隊から聯隊本部へ異動になっていたのかも知れない。前日の『従軍日誌』に採録された桂報告は二一日の午後二時四〇分で、この日の桂報告は二一日の午後四時四五分だから、どちらも缸瓦寨占領の報告で、同じような内容になっている。

草河口の立見第一〇旅団長からの報告も、同じ二一日の夕方に発信されたもので、きわめて面白い情報を伝えている。立見支隊は鳳凰城の前線である草河口に駐屯していたが、梨子舗に伏兵を置いて、清国軍の斥候一名を捕らえ、高家嶺に三営（一営約五〇〇人として約千五〇〇人）の新募兵、指揮官は高で、小銃は旧式のゲベール銃、連山関には一営と馬隊若干、摩天嶺は三営でドイツ製のモーゼル小銃で装備し、指揮官は聶士成、という戦力情報を得た。さらに、兵士たちの噂話として、依克唐阿将軍すら敗退した、まして我々では敵わない、とうてい日本兵には当たっては駄目だ、という空気が広がり、昨夜も三名脱走した、こうして日本兵を恐れて脱走すれば斬に処せられる、止

まっても逃げても難しい、と語ったようだ。鳳凰城守備の一方で、立見第一〇旅団はさまざまな情報収集を行っていたが、『日清戦史』にはこれらは採録されなかった。

十二月二十二日　晴天　〇・四〔零下一七・五度〕

理部和智少佐ハ第一軍副官ニ補セラレタリ／情報アリ左ノ如シ

十二月廿一日午后四時四十五分発　桂中将発

海城ニ進出セル我戦略運動ハ一ノ結果蓋平ニ在リシ敵将宋慶トシテ其位置ニ止マルコト能ハザラシム、彼レカ昨今師団ノ側面ヲ脅威シツヽ、我前面ヲ横過シテ大石岑ヨリ水岑江江有賽附近ヲ経テ運動ス、依テ師団ハ彼レノ遼陽方向向（ママ）ニ退却スルヲ挫ケ之レヲ西方ニ圧迫セシ為メニ今日紅（ママ）家賽附近ニ於テ彼レヲ攻撃シ劇戦五時間実質四会ノ後之レヲ撃破ス、敵ハ営口方行ニ潰走ス、敵ノ兵力ハ概ネ二万ヲ下ラズ、師団ハ四大隊砲五中隊ヲ以テ之レヲ当ル、彼レ我死傷未明

仝午后四時三十分草河口ニ於テ立見少将発

今朝梨子舗ニ「ヂベール」ナリ伏兵ヲ設ケ、敵ノ斥候一名ヲ傷ケ之レヲ生擒セリ、携帯銃ハ捕虜ノ言ニ依レハ自今高家嶺ノ敵ハ新正営新副営新別営ノ三営ニシテ皆新募兵ナリ、其携帯銃ハ何レモ「ゲベール」ナリ、二人持ノ長キ銃モ若干アリ、其隊長高ナリ、連山関ニハ仁字営ト馬隊若干アリ、魔天嶺ニハ盛字軍三営ニシテ即別中后ノ三営ナリ、其携帯銃ハ「モーゼール」ナリ、其将ハ墨（ママ）士成ナリ、依テ蔣軍敗走ノ節ハ魔天嶺ハ通過セザルノ敵ノ兵卒等ハ依将軍スラ破退セリ、況ヤ我等ニ於テヲヤ、到底日本兵ニハ当ル不可、昨夜モ三名逃亡セリ、敵兵目下ノ状況ハ進ンデ日本兵ヲ恐レ逃亡スレハ斬者セラル、何レモ困難ニアルナリト。

一二月二三日は日曜日だったので、酒一合が分配された。

十二月二十三日　晴天　一・〇〔零下一七・二度〕

此日酒一合ツヽ分配セラル

二四日（月曜）は、降雪はなかったが、露が激しく固まった。

十二月二十四日　晴天　〇・五〔零下一七・五度〕

此日露甚シク恰モ積雪ノ如シ

二五日（火曜）は特記することがなかったようで、零下の晴天のみの記述だった。

十二月二十五日　晴天　〇・七〔零下一七・四度〕

（2）九連城への移駐

義州でののんびりした冬営にも終止符が打たれることになった。その師団命令は一二月二三日に発せられていた（『日清戦史』第二巻五五六頁）。

是ヨリ先キ（二十三日）第五師団長ハ九連城ニ在ル野戦砲兵第五聯隊本部及第二大隊ヲ鳳凰城ニ移シテ立見旅団ニ増加シ、同聯隊第三大隊ヲ九連城ニ移スノ命令ヲ発セリ（其結果同聯隊長中佐柴田正孝ハ本部及第二大隊ヲ率キ二十五日九連城ヲ出発シ二十七日鳳凰城ニ到著セリ、又同聯隊第三大隊（長、少佐金子直寿）ハ二十六日九連城ニ移転セリ）（『日清戦史』第二巻五五六頁。本文中

の（　）は二行割りを記述した）

しばしば襲来する清国軍に対抗するため、鳳凰城の立見旅団（混成第一〇旅団）を増強する必要から、野砲一箇大隊を鳳凰城に移動させ、空いた九連城の砲兵隊として筆者の野砲第三大隊が移ることになった。『従軍日誌』筆者の書いている、一二月二六日（水曜）朝から第三大隊は九連城に移り、それは第二大隊の穴埋めだった、ということは正しい。

十二月二十六日　晴天　三・〇〔零下一六・一度〕
此日午前七時ヨリ九連城ニ移転ス、是レ第二大隊鳳凰城ニ前進セシヲ以テナリ

移動を終わった一二月二七日（木曜）から、また九連城での冬営生活が続く。相変わらず寒く、雪は三〇センチ以上、寒暖計は摂氏の零下一七・七度を示していた。

十二月二十七日　雪　〇・一四〔零下一七・七度〕
今朝以来降雪尺余ニ及ヒ寒暖計室外〇度

（3）缸瓦寨攻略戦

二八日（金曜）も零下厳しい晴天だった。前日の二七日朝、海城の第三師団からの電報は、昼過ぎに安東県に着き、九連城の第五師団司令部に二八日届いた。内容は、缸瓦寨攻略戦の詳報で、二一日、二二日の桂報告に次ぐ第三報である。この報告にあるように、戦闘詳報では自軍の損害と共に、敵軍の損害も記録していると思われるが、『日清戦史』には清国軍の損失はほとんど記録することがない。この缸瓦寨攻略戦でも第四巻一二八頁に、両軍の戦闘人員と大砲数、第三師団の消費弾数と死傷者は記録したが、清国軍についてはない。その中で、この海城発電の中に、「死者二三百人」「（負傷者は）死者ノ倍スルナラン」と記しているのは貴重な史料である。

十二月二十八日　晴天　〇・一五〔零下一七・七度〕
情報十二月廿七日午前十時四十五分海城発　午后十二時四十分安東県ニ着
十七日以来諸情ニ依リ宋慶ノ軍ハ大石橋虎障屯（支那国）ニアリ蓋家屯附近ヲ経テ北行スルモノノ如ク十八日午后二時ニハ我前哨線ノ方行一二里ノ処ニ敵ノ兵騎兵来リ、柳公屯蓋家屯紅瓦寨附近ハ敵ノ大部隊在ルヲ知リ、依而翌十九日之レヲ攻撃スルニ決シテ前前進セシニ柳公屯及蓋家敵ハ退却セリ、依而大迫少将ヲシテ歩兵第三大隊騎兵一中隊砲兵三中隊ヲ以テ紅瓦寨ヘ前進ヲ命シ其他ハ蓋家屯八里家子ニ停止セシムナリト、依而大隊ヲ八里家子ニ止メ蓋平街道ノ守備トナシ本隊ハ再ビ前進ス
大迫ノ前営ハ午后一時前開戦セシモ敵強大ノ兵力現ハレ紅尾寨及其東方ノ森林ニ拠リ頑固ニ防禦スルニ次テ本隊ノ到着マテ待ズノ戦ヲナス、午后四時過キ大隊ハ突貫シテ之レヲ占領ス、依而直チニ本隊ノ砲兵二中隊ヲ更ニ増加シ、仝時ニ大島少将ヲシテ本道ヨリ紅瓦寨ヲ攻撃セシメ突貫四回ノ後江瓦寨ヲ占領ス、敵兵力ハ一万余連射砲其他砲七門ヲ有シ防戦尤モ力メラルモ我予備隊ノ増加ニ由テ誘発シタル勇猛ナル全線ノ突撃ニ不堪遂ニ二道ヲ取テ潰走ス、即チ一部ハ藍旗保大部ハ高利ノ方向ニ退却ス、紅瓦寨村端ニ

ハ防禦工事ヲ施セリ、敵ノ死傷ハ今迄得タル報告ニ依レバ死者二三百人負傷者ノ数未タ詳カナラザルトモ死者ノ倍スルナラン

師団ハ海城ノ根拠ヲ顧慮セシヲ以テ一部隊ヲ紅瓦(ママ)賽ニ残シ他ハ即夜海城ニ帰還セリ

昨日中ノ戦闘運動ニ困難ナルニ係ラズ優勢ノ敵ヲ撃退シ得タルハ全クハ天皇陛下ノ御威徳将校以下ノ忠戦ニ依ル、各隊ハ紅瓦(ママ)賽ニ突入スルヤ帝国万歳ヲ三唱セリ、今日迄得タル報告ニ依レバ宗慶(ママ)ハ敗後田庄台ニ退却シ目下全地ニ在リ、其一部ハ后午千家伽房及ヒ其此方ニ在リ、詳報ハ復ス。

二九日(土曜)も寒気が厳しかったが、新任の奥保鞏が第五師団長に着任した。内地からの出発だったために発令の一〇日後になった。

十二月二十九日　晴天　〇・一三〔零下一七・七度〕

此日新任ノ第五師団長奥中将到着セラル。

三〇日は日曜だったためか、晴天と気温が記録されただけだった。

十二月三十日　晴天　〇・一九〔零下一七・七度〕

三一日(月曜)はさらに寒気が厳しく、室外は相変わらず零下一七度以下だったが、兵舎の中は華氏一六度(摂氏八・八度)になった。ストーブはあったのであろうか。

十二月三十一日　晴天　〇・一七〔零下一七・七度〕

此日寒気強ク寒暖計〇度以下室内十六度ナリ

四　開戦二年目―一八九五年

(1)第一軍の損害と戦利品

いよいよ新年になった。一八九五年元旦(火曜)も相変わらずの寒さと晴天だったが、朝は「新年ノ儀式」、午後は余興があった。一方で砲兵隊の輓馬が逃げたため、午後から馬の捜索が行われた。昨年の戦闘結果が、師団から発表されて、掲示されたのだろう、克明なメモが記されている。整理すると次のようになる。

明治二八年一月調

日本軍戦死者　四一三　負傷者　一七一二

清国軍戦死者　六六六〇　負傷者　九三〇〇　捕虜　一一六四

戦利品　大砲　六〇七／小銃　七四〇〇／

砲弾　二六一万一七四一

小銃弾七七四五万八七八五／

米穀類　一万七六五七石／金銀貨　一〇〇万円

天幕　三三二六／軍旗　四七七／

船舶　二一／軍　三艘

雑物その他概価　七三一万三〇〇〇円

終戦後の日本軍損失は、『日清戦史』第八巻所収の「附録第百二十減耗辞任階級別一覧表」と「附録第百二十一　減耗人員師団別一覧表」で判明するが、後者によれば、戦死者数(戦死と傷死の合計)は第三師団三五二名、第五師団三八二名で合計七三四名なのでここに示された両軍の損失数は、第一軍の合計数と考えられる。すると戦利品

も第一軍の確保数と考えるのが合理的である。

戦利品についても『日清戦史』第八巻所収「附録第百十九　陸軍戦利品整理員数表」に詳細な数が挙げられているが、この表と『従軍日誌』の記録があわない。四分類に分けられた大砲の合計点数は七九五だが、第一軍捕獲分と推定した六〇七に極めて近い。第一軍の分が多すぎる。威海衛での捕獲数は多数に上るから、第一軍捕獲数と考えられる六〇七点には、その後破棄された数も含まれていると考えたい。砲弾数は、『日清戦史』一八万八九二三、『従軍日誌』二六一万一七四一で、前者が圧倒的に少ない。これは「分捕砲隊」が編制され、戦場で活動しているから、実戦での消耗数が多数あったことを示していると考えられる。『日清戦史』には「金銀貨」など通貨の捕獲数が全く見られない。実際には『従軍日誌』にあるように、多数の軍資金が捕獲されていた。義和団戦争の際の「馬蹄銀事件」のような不祥事がなかったとすれば、各地の軍政署で使用したり、食料等の調達に使ったものと推定できる。

明治廿八年

一月一日　晴天　〇・一六〔零下一七・七度〕

新年ノ儀式トシテ各人相当ノ礼式ヲ行ハル、此日ハ新年式ノ事故餅六個雑肉廿匁山羊肉百十匁酒二合ツヽヲ分配セラル／午后一時ヨリ五時マデ興行ヲナス／此日第二段列ニ放馬アリ、捜索ノ為メ勤務明ノ兵午后ヨリ出張／明治廿八年一月調、吾戦死者四百十三人負傷千七百十二人、清戦死者六千六百六十負傷九千三百人生擒一千百六十四人、分捕品大砲六百七門小銃七千四挺砲弾二百六十一万千七百四十一小銃弾七千七百四十五万八千七百八十五米穀類一万七千六百五十七石金銀貨幣百万円天幕三千三百二十六軍旗四百七十七船舶二十一艘軍三艘雑物其概価七百三十一万三千円

（2）弛緩する待機部隊

一月二日（水曜）も同様の天候で、焼酎一合の配給があった。元旦に行方不明になった砲兵隊の輓馬が見つからなかったため、さらに兵を増員して捜索にあたることになった。「坂中尉」は筆者の同僚だろう。

一月二日　晴天　〇・一六〔零下一七・七度〕

此日焼酎一合宛ヲ分配セラル／此日前日ノ放馬行衛不分明ニ付中隊各兵ヲ出シ坂中尉之レヲ指揮ス

三日（木曜）も同様の天候で、夜遅くになって、不寝番しているはずの衛兵所から出火し、堡塁や兵営など三ヶ所も焼失した。軍紀が弛んでいたのかも知れない。被害は大きい。

一月三日　晴天　〇・一四〔零下一七・七度〕

午后十時ヨリ第五中隊保塁中衛兵所ヨリ出火シ三ケノ保塁兵営ヲ焼失セリ

一月四日（金曜）と五日（土曜）は何もなかったようで、晴天と寒さだけが記された。

一月四日　晴天　〇・二一〔零下一七・七度〕

一月五日　晴天　〇・一九〔零下一七・七度〕

六日（日曜）は晴天だったが、昼間は華氏二二度（摂氏零下五・六度）まで上がった。少し暖かい日と言える。この記述から、毎日の日

記に記されている気温は朝の時点だと確認できる。

一月六日　晴天　〇・二〇〔零下一七・七度〕

此日近日来ノ暖日ニシテ二十二度ニ上昇ス

七日(月曜)も同様の天候で、八日(火曜)になって、また気温が上昇して華氏二八度（摂氏零下二・二度）にもなり、積雪も初めて溶け始めた。

一月七日　晴天　〇・一四〔零下一七・七度〕

一月八日　晴天　〇・一〔零下一七・七度〕

此日午后二時頃暖計(ママ)二十八度ニ上昇シ雪始メテ溶解セントス

九日(水曜)には連山関で清国軍の動きが見られたのか、一箇大隊が出動している。この日も日本酒一合が配給された。平日でもあるので、寒さ凌ぎだと思われる。

一月九日　晴天　〇・一三〔零下一七・七度〕

此日午前十一時歩兵第廿一聯隊第一大隊ハ連山関ニ向テ前進シタリ／此日酒一合ツヽ分配セラル

(3) 威海衛攻略作戦

一〇日(木曜)も寒さ厳しく、晴天が続く。追加と思われる毛布と外套が各人に配布された。大本営からの電報は、山東半島の上陸が終わり、威海衛攻撃が始まったことを伝えてきた。ただ第二軍が地上砲台を占領し、海軍と共に威海衛湾内の「日島」と「劉公島」を砲撃するのは一月三〇日である（『日清戦史』第六巻一一二頁）ため、記録している大本営発電の「一月六日」も、『従軍日誌』の日付もおかしい。大本営からの電報は二月九日発で、『従軍日誌』も二月一〇日の項に書くはずではなかったのか。

一月十日　晴天　〇・一九〔零下一七・七度〕

此日寒防用毛布外套到着、各人ニ分配セラル

大本営ヨリノ電報一月九日広島発

一月六日我艦隊ハ陸上砲台（艦隊ノ陸戦隊ニシテ海岸砲ヲ使用）ト協力シ「ニツトウ」及ヒ劉公島ノ砲台ヲ破壊スルノ計画ニシテ陸上砲台ヨリ射撃セシ際敵ハ水雷艇十余艘港外ニ出デ来シ第一軍遊撃隊之レヲ追撃シテ遂ニ竜川港（其罘ノ隣港）ニ於テ破壊シ若シクハ乗リ上ケノ為メ不用ニ帰セシメタリ、又我砲撃ハ「ニトウ」砲台ノ火薬庫ヲ爆裂セシメタルヲ以テ目下敵ノ砲台一劉公島ニ在ルノミナレリ

一一日(金曜)、一二日(土曜)、一三日(日曜)と晴天続きで寒さも相変わらず続いている。

一月十一日　晴天　〇・一九〔零下一七・七度〕

一月十二日　晴天　〇・二四〔零下一七・六度〕

一月十三日　晴天　〇・二三〔零下一七・六度〕

一四日(月曜)になって寒さは少し厳しくなり（華氏〇・三一は摂氏一七・六度)、一五日(火曜)まで降雪が続いた。

一月十四日　晴天　寒暖計〇度三一ト降

一月十五日　晴天　〇・一五〔零下一七・七度〕

昨日来ノ降雪三寸余

一六日(水曜)、一七日(木曜)と特記することもなく、晴天続きだっ

た。

一月十六日　晴天　〇・二一〔零下一七・六度〕

一月十七日　晴天　〇・一八〔零下一七・七度〕

一八日(金曜)も寒い晴天で、慰問品の配給が二点あった。滋賀県会議員の寄贈した「サンライス」は京都の煙草製造会社・村井兄弟商会が一八九一年から製造販売していた両切り紙巻き煙草。サンライス一箱と、福島県からの巻煙草三〇本は、喫煙者を喜ばせる寄贈だった。

一月十八日　晴天　〇・二五〔零下一七・六度〕

此日滋賀県会議員ヨリ寄贈セルサンライス一個、福島県有志者ヨリ寄贈シタル巻煙草三十本ツヽヲ分配ス

一九日(土曜)は特に寒気が強く、華氏の零下二四度以下（摂氏の零下三一・一度）になったが観測できず実際の気温は判らなかった。この日も慰問品の配給があり、大阪市の殿井商会（煙草の輸入会社）からサンライス一箱と、大阪市民の寄贈した手拭い一本だった。毎日の煙草配給。一般社会ではまだ刻み煙草が多かった時代に、欧米風の紙巻煙草の喫煙慣習が、軍隊から広がっていった。

一月十九日　晴天　寒気強ク〇度以下二四度ヨリ尚ホ下リ其度不分

此日殿井商会ヨリ寄贈品サンライス一個、大阪市民ヨリ寄贈品手拭一枚ヲ分配

二〇日(日曜)も寒気の強い晴天で、二日前の一八日に海城で攻防戦があったことを桂第三師団長が打電してきた。年が明けての海城の攻防戦は一月一七日が最初だった。海城地方の状況視察を名目として、野津第一軍司令官が一四日岫巌を出発して、一六日には海城に到着していた（第四巻二一五頁）。野津軍司令官の直接指導で海城攻防戦が行われたことになる。桂報告の通り、夕方（『日清戦史』第四巻二二九頁では「五時三〇分頃」）には清国軍が撤退した。

広島の大本営からの電報は、山東半島作戦のために一二月一六日第二師団と第六師団を第二軍に加える、という戦闘序列変更を命じており（『日清戦史』第六巻四頁）、それの実施状況を伝えてきたものである。山東半島には北洋水師の拠点である威海衛があり、そこを押さえて終戦に持ち込む計画だった。

一月二十日　晴天　〇・二三〔零下一七・七度〕

一月十八日午后二時海城発桂中将ヨリ

遼陽方面ノ敵ハ昨十七日午前八時頃ヨリ遼陽頼屯牛荘ノ三街道ヨリ海城ニ向テ攻撃シ来リ、正頃（マヽ）其戦線ヲ二里余ニ延長シ我前哨線ノ前方約千五百米乃至二千米ノ地ニ達セリ、第三師団ハ海城北方ノ陣地ニ依リテ午后四時頃迄防戦セシ後攻撃ニ転シ敵ノ右翼ニ迫リ午后六時過キ全力之レヲ撃退セリ／敵ノ兵力ハ一万余ニシテ其大部ハ北方及西北方ニ退キ一部ハ牛荘方向ニ退却セリ、戦死傷四十名、敵未詳、分捕大砲三門其他取調中

大本営ヨリ通報

第二師団ハ十月十一日ニ宇品ヲ出発シ第六師団ハ十二日ヨリ四日間ニ小倉ヲ出発シ共ニ大連湾ニ至リ第二軍司令官ノ指揮下ニ入ラシム

二一日(月曜)も寒かったが、兵舎の移動が行われた。

一月二十一日　晴天　〇・二三〔零下一七・七度〕
此日中隊長舎及ヒ第一第二段列ヲ古築ノ兵営内ニ移サレタリ

二二日(火曜)も寒く、降雪となった。

一一月二十二日　曇　午后降雪　〇・一七〔零下一七・七度〕

二三日(水曜)も寒かった。摂氏で計算すると、朝は零下一七・七度、午後二時半は零下一六・一度、夕方は零下一二・二度だった。いずれにしても零下の極寒の世界だった。第二師団は一月一九日大連湾を出港、二〇日から二二日に山東半島栄城湾に上陸した(第六巻一六〜二四頁)。

一月二十三日　晴天　〇・二一〔零下一七・七度〕
昨日来降雪三四寸ニ及ブモ気温上昇シテ朝〇度二、午后二時半三度　夕二十度ナリ
第三軍参謀官ヨリ通報　十八日午前八時五分発
第二師団ハ山東角竜睡島ニ上陸ノ目的ニテ十九日連湾(ママ)出発、仝軍司令部ハ廿一日ヨリ第十一旅団ト共ニ出発ノ筈
仝廿二日午后三時二十五分発
上陸点ハ敵ノ歩兵約三百アリテ小抵抗ノ后退却シ我海軍野戦隊ハ砲四門ヲ分捕リ上陸好都合ナリ／栄城ノ南湾ニモ敵兵三百余アリシカ南方ヘ向テ退却シタリ

(4) 海城第二回防衛戦

二四日(木曜)も寒気厳しい晴天。藁製の長靴一足と草鞋二足が分配された。戦場に向かわないので室内用だろうか。小川参謀とは第一軍の参謀長小川又次少将のことだろうか。「秀巌」は「岫巌」の誤りだろう。岫巌は海城と大孤山をつなぐ中間地点で、第一軍司令部が置かれていた。一月二二日から始まる海城第二回防衛戦を伝えてきたものである。『日清戦史』第四巻二三六〜二五四頁に述べられる「二　第二回ノ防戦」によれば、清国軍は、長順将軍の率いる大砲約一〇門を持つ靖辺軍、依克唐阿将軍の率いる大砲二門を持つ敵愾軍・鎮辺軍、徐邦道総兵の率いる大砲四門の拱衛軍で総数約二万だった(同二五三頁)。将軍の名前も姓だけだが、日本軍は把握していた。「下士卒五名は捕虜」(同)が有効活用されたのだろう。激戦を乗り切った自信からだろうか、『日清戦史』は「清国軍ハ屍体約百二十」と『従軍日誌』の記録する「死体百余」より正確な数字を記録している(同)。

一月二十四日　晴天　〇・二六〔零下一七・六度〕
此日藁製ノ長靴ワラシ二足ヲ分配ス
小川参謀ヨリ秀巌発　廿三日午前八時四十分出
昨日来遼陽方面ノ敵ハ海城ニ向ヒ再ヒ来襲ノ模様アリシカ今朝ニ至リ去ル十七日ト殆ンド仝一ノ正面ヲ取リ攻撃シ来レリ、依テ第三師団ハ敵ヲ三百米ニ近付ケ午后一時過キヨリ歩兵第五旅団ノ大部ト歩兵第九聯隊一大隊砲兵三中隊ヲ以テ敵ノ右側ニ向ヒ逆撃セシム、敵ハ狼狽シテ其大部ハ東地ニ其一部ハ牛荘方向ニ潰走セリ、捕虜ノ言ニ依レバ長及依ノ二将軍此攻撃ヲ指揮セリト言ヘリ、其兵力三万ヲ降ラズ、我死傷二十七名敵ノ死傷未明ナレトモ死体百余ヲ戦場ヘ遺棄セリ

二五日(金曜)も寒さ厳しく、寒気対策として毛糸製の靴下と酒五勺

が分配された。平壌戦に参加した軍人には、有栖川宮の娘が寄付した手拭いが分配された。

一月廿五日　晴天　〇・二八〔零下一七・六度〕
此日有栖川親王殿下ノ御令嬢ヨリ平壌ノ戦役ニ従事セシ者ニ限リ下賜セラル、所ノ手拭ヲ分配セラレタリ、尚亦毛糸製ノ靴下足酒五勺ツヽヲ分配
情報アリ左ノ如シ
　第二師団ハ本日栄城県左高家庄附近ニ達シ軍ハ廿五日ヨリ運動ヲ起ス予定ナリ、栄城湾附近ニ在リシ敵ハ約三営ニシテ威海衛方行ニ退却シ目下砂格庄ニ敵ヲ見ユ

二六日（土曜）は寒さに強い風が加わり、二七日（日曜）にかけて雪が降り、三〇センチ程度に積もった。天皇からも、凍傷予防トシテフランネルの綿布が約一・五メートル分配された。

一月二十六日　晴天風強　〇・一一〔零下一七・七度〕
一月二十七日　晴天　〇・一六〔零下一七・七度〕
昨日来降雪尺ニ及ブ
此日陛下ヨリ下賜セラレタルフランネル布綿布ノモノ約五尺位、各人凍傷予防トシテ分与セラル

二八日（月曜）も寒気に強い風が加わった。二九日（火曜）は、摂氏で換算すると、朝零下一七・六度、午後二時零下一七・七度、夕方零下一七・七度と零下一七度台が続いた。三〇日（水曜）も同じような気温だった。二九日夜の降雪も三〇センチ余りになり、歩くのも困難になった。砲兵隊には輓馬が多数付属されているが、馬にも寒気対策として布一枚ずつが配られた。

一月廿八日　晴天　風強　〇・一九〔零下一七・七度〕
一月廿九日　晴天　朝〇度二九　午后二時〇・二　夕〇度〇六
一月三十日　晴天　〇・二一〔零下一七・七度〕
昨夜降雪シテ積雪尺余、歩行困難ス／此日馬匹ニ寒防用トシテ布一枚ツヽ分配セラル
三一日（木曜）も雪となり、寒気は厳しくなった。

一月三十一日　雪　一・一四〔零下一七・一度〕
　此日亦降雪アリテ寒気一層増ス

二月一日（金曜）は降雪はなかったようだが、仙台と博多からの慰問品である巻煙草二本ずつが分配された。新しく野砲六門が九連城に到着したので、鳳凰城の第二大隊に転送した。

二月一日　晴天　〇・二四〔零下一七・六度〕
此日巻煙草二本ツヽヲ分配セラル、但シ寄贈品ニシテ宮城新聞記者中及筑前博多町有志ヨリ送リシモノ、此日野砲兵六門九連城ニ到着ニ付第二大隊ニ在ル鳳凰城ニ送ル

（5）参謀総長閑院宮熾仁親王死去と彰仁親王の親補

二日（土曜）も同じような寒気だった。岫巌からの電報が記されている。威海衛攻略作戦を続けている第二軍の動向である。電報の言う一月三〇日は、威海衛南岸諸砲台が第三軍によって占領された日で、「鳳杯集」「鳳村集」は鳳林集の誤記。「布告」もこの電報によってもたらされたのだろうが、一月二四日参謀総長閑院宮熾仁親王の死去が

公表された。実は大本営に勤務していた広島で発病して、兵庫県の舞子の別荘で療養していたのだが、一五日に亡くなった。『明治天皇御伝記史料　明治軍事史』は「一月十五日遂に薨去せられたるも喪を秘して発せす」（下巻九四六頁）と記している。国葬は二九日に行われた。その後任の参謀総長に就いたのが近衛師団長であった小松宮彰仁親王で、北白川宮能久親王の兄にあたる。参謀総長親補は一月二六日。全軍に新参謀総長としての決意が布告されたのを電報で知らせたものだろう。前掲『明治軍事史』に引用されている文章（九四八～九四九頁）とは少し異なるが、打電と筆者の転記の間で誤記となったと思われる。天皇に次ぐ陸軍の高位の参謀総長の名前を筆者は誤記している。

二月二日　晴天　〇・二五〔零下一七・六度〕

情報アリ、左ノ如シ、二月一日午后三時三十分秀巌発

第二軍ハ一月三十日午前七時ヨリ百尺崖処及ヒ其西南方ニ在ル高地ノ敵ヲ攻撃セリ、即チ第三師団ハ鮑家ヨリ孤山後、第二師団ハ温泉場虎山ノ端ヨリ鳳杯集東南高地ニ向ヒ前進、午后二時頃ニ至リ全高地ノ諸砲台ヲ占領セリ、敵鳳村集ニ退却セリ、午前七時ヨリ我艦隊ハ百尺崖砲台ヲ砲撃シ我軍ノ運動ニ協力シタリ、敵ノ艦隊ハ尚湾内ニ在リ、第三軍司令部ハ其夜北部ノ温泉場ニ、第二第六旅団ハ各其各占領地ニ宿営ス

布告　参謀長ノ重任アル平時ニ在リテハ既ニ然トス、況外国ニ交戦ノ日ニ於テヲヤ、昨年清国ト交戦以来我国ノ頻リニ克捷ヲ奏スルトニ因リ　大元帥陛下ノ聖威聖徳ト将校下士卒ノ忠勇トニ因ルハ参謀前総長ノ経営参画ノ方宜又々多キニ居ル、而テ不幸中道ニシテ薨去セリ、不肖影仁ヲシテ乏キヲ此職ニ受ケシメラル恐懼ノ至リニ堪ヘズ、然レトモ勅旨ノ厳ナル敢テ固辞スルヲ得ズ、茲ニ慎テ之レヲ拝受シ将ニ拮据勉励専ラ大元帥陛下ノ大命ヲ遵奉シ前総長ノ規画事トシ皇猷ヲ翼賛セントス、其意ヲ休悉シ奉細大トナリ毎々影仁ノ不肖ヲ輔シテ以テ影仁ヲシテ奉スル処ノ任務ヲ全フセシメンコトヲ希望ス

明治廿八年一月廿六日　　参謀総長　影仁親王

（6）三〇％の罹病者と〇・二％の無病健全者

二月三日（日曜）の記事はなく、四日（月曜）の記事に続く。四日、五日（火曜）ともに晴天で寒気が厳しかった。

二月四日　晴天　〇・一三〔零下一七・七度〕

二月五日　晴天　〇・一八〔零下一七・七度〕

六日（水曜）も晴天の寒気で、第三大隊の罹病者を調べている。数字を整理すれば、次のようになる。

出征以来　無病健全者　八：下士官二、上等兵一、一等卒二、二等卒一、輸卒三

出征以来　罹病者　一二八

砲兵の一箇大隊は約四〇〇名だから、一八九四年六月初旬から一八九五年一月末までの八ヶ月間で三〇％の罹病者を出しており、全く無病健全者はわずか〇・二％しかいなかった。戦争は、戦闘だけが敵ではなく、病気という大きな敵もいた。衛生状態の悪い中に長期間人間を閉じ込めておくということは、このような数字となって現れていた。

二月六日　晴天　〇・一九〔零下一七・七度〕
此日出発以来無病健全ノ者ノ取調ナル僅カ八人ナリ、但シ出発当時ヨリ病ニ罹リシモノ現在当隊ニ附属シアルモノ百二十八名ナリ、無病者八人ノ内訳ハ下士十二名上等兵一名一等卒二名二等卒一名輸卒三名ナリ

七日（木曜）も晴天だったが、気温の記し方に不審がある。表記の二度が正しければ零下一六・七度だが、毎日の例にしたがって〇・二〇の誤記であれば零下一七・七度となる。いずれにしても寒気はまだまだ厳しい。筆者の第三大隊から交替の兵士が出され、鳳凰城に向かった。

二月七日　晴天　〇二・〇
此日第三大隊ハ交（ママ）ノ兵卒ノ出発ニテ鳳凰城ニ至ル

八日（金曜）も晴天で寒気が続いた。この気温表記も前述したことと同じで、〇・二八の誤記であれば零下一七・六度、〇二・八が正しければ零下一六・二度。この日も慰問品の「西洋手拭」（タオルのことか）一と「普通手拭」（日本の手拭いのことか）二、靴下一足が分配された。

二月八日　晴天　〇二・八
此日寄贈ノ西洋手拭一普通手拭二靴下一足分与セラル

九日（土曜）も晴天。暖かったというのだから華氏「七・〇」度、つまり摂氏零下一三・九度は誤記でないだろう。正午には摂氏零下一・一度まで上昇したらしい。

二月九日　晴天　七・〇〔零下一三・九度〕
此日暖気ニシテ寒暖計正午三十度上昇ス

一〇日（日曜）も晴天で、七日に出した兵士が交替の第二大隊から来着した。

二月十（ママ）　晴天　五・〇〔零下一五度〕
此日第二大隊ヨリ交換ノ兵来着

二月一一日（月曜）は紀元節なので、勤務は免除され、午後は余興があり、酒と豚肉約一八〇グラムが配給となった。肉は部隊ごとに集められ、炊飯部で料理されただろう。肉じゃがだったかもしれない。

二月十一日　晴天　〇・一四〔零下一七・七度〕
此日紀元節ニ付酒ニ合豚肉五十匁ヲ与給／午后一時ヨリ興行ヲ行ル

一二日（火曜）、一三日（水曜）も晴天で零下の日が続いた。

二月十二日　晴天　二・〇〔零下一五・六度〕
二月十三日　晴天　二・〇〔零下一五・六度〕

二月一四日（木曜）は久し振りに雨で、そのため積雪が少し溶け始めた。

二月十四日　雨　〇・五〔零下一七・五度〕
本日降雨ユエニ付積雪ハ漸次溶解ス／午前一時十分秀巌発　只今左ノ報アリタリ、依而報告ス

「従軍日記」は突然、この一行で終わる。全体で一冊子だが、「二月十四日」分は、冊子の裏表紙にあたる頁に書かれている。「秀巌発」の報告なる「左ノ報」は一行も書かれていない。次の冊子の用意が出来たので、それに書いたのかも知れない。とすると、この著者の「従軍日記」は少なくとももう一冊存在したことになる。残念ながら私は

所有していないし、その行方がわかる情報を持っているわけでもない。この日記に関心を持たれた方で、なんらかの事情をご存じの方がおられれば、是非ご提供を願いたい。

筆者の属する野砲兵第五聯隊第三大隊は、二月一九日師団命令により、さらに前線の「鳳凰城附近ノ要地」に歩兵第一〇旅団（二箇大隊欠）と共に派遣された（『日清戦史』第二巻五七三頁）。立見第一〇旅団の主力に編入されたことになる。戦闘そのものは縮小過程にあったため、『日清戦史』は「第五師団守備地方ニ於ケル情況ハ斯ノ如クニシテ、爾後一回ノ交戦ナク以テ平和克復ノ時ニ及ヘリ」（五九一頁）と記述しているので、筆者の無事帰還も可能性が高い。

一方で、靖国神社編『靖国忠魂誌』第一巻（靖国神社社務所、一九三五年）を調べると、二月一四日から下関条約調印（四月一七日）後第五師団の復員（八月一日）までに没したと記されている野砲第五聯隊第五中隊の下士官・将校は次の二名しかいない。

四月一八日　広島陸軍予備病院　一軍曹　乗本　寛　岡山（七二四頁）
三月二五日　朝鮮龍川兵站病院　二軍曹　松本卯吉　香川（八七八頁）

将校の戦没はなく、一等軍曹（後の曹長）と二等軍曹（後の軍曹）の二名だけである。

いずれにしてもこの『従軍日誌』が語る日清戦争は以上の通りである。

（はらだ　けいいち　歴史学科）

二〇一四年十一月七日受理